



電光鉄火

紅

羽沢向一

表紙イラスト：みかん。

試し読み版

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『電光鉄火 紅』
に基づいて作成しております。

※本作は二次元ぶち文庫『ウィングファミリー』（キルタイムコミュニケーション刊）とともに読みいただきますと、より楽しみいただけます。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



電光鉄火

紅

羽沢向一
表紙／みかん。

登場人物紹介

Characters

あおい くないずきん

葵 (紅頭巾)

尊敬する父を盗賊「鬼火の権三」によって惨殺された少女剣士。父の仇を討つため、「紅頭巾」として毎夜盗賊達を退治していく。

さち

幸

葵と姉妹のように育った少女。父なき今、葵の唯一の家族。

おにび こんぞう

鬼火の権三

不思議な術を用いる盗賊。

江戸八百八町草木も眠る丑三つ時。

深川にある江戸一番の材木商坂井屋の屋敷の前に、黒い影の一団がいた。夜の闇に溶けこむ全身黒ずくめの男たちのなかでは、ひととき目を引く六尺半約195cmはあるうかという大男が、ごく狭い範囲にだけ明瞭に聞こえる盗賊独特の発声法で告げた。

「いいか。手はずはわかっているな。屋敷にいる者は年寄りだろうが赤ん坊だろうがかまわず皆殺しにしろ。本物の外道働きを、奉行所の腰抜けどもに思い知らせてやれ」

お頭の言葉に、子分たちがいっせいにうなずく。影のひとりが、屋敷の戸を開けた。
「うぐっ」

うめき声とともに、黒い影が鳩尾に当て身を食らって、押し戻される。開いた戸の向こうから、どよめく盗賊たちの前に赤い影が出現した。

闇夜を裂いて現れたのは、真紅の地に黄色い稲妻が幾筋も走るといふ、印象的な模様の着物と袴の侍だった。顔はやはり赤い頭巾で隠され、強い眼光を放つ目だけが覗き、後ろには長い髪が一本に束ねて流れている。

「何やつ！」

と、かけられた声に、真紅の頭巾がまた一步前へ出る。

「法から逃れた悪党どもに、天の怒りを打ち落す、人呼んでくれないずきん紅頭巾」

お頭が不敵な声を返した。

「なるほど。最近江戸で盗賊たちを退治しているという、評判のおせつかい野郎か。いや、若侍のなりをしているが、その声は女だな。それもけっこう若いぞ」

「ようやく見つけたぞ、鬼火の権三。今夜がおまえの最期と知れ！」

そう言いながら、紅頭巾の腰には刀がない。盗賊たちの目にも、寸鉄帯びぬ徒手空拳に映る。

「しゃらくせえ。飛んで火にいる夏の虫とは、おまえのことよ」

ひとりが懐からあいくち匕首を抜き、赤い影へ飛びかかった。瞬間、紅頭巾の右手からまばゆい深紅の電光が放たれる。

奇怪な稲妻は形を変えて、ひと振りの抜き身の刀と化した。朱塗りの柄と鏝から、緋色にぎらつく刀身がのびる奇妙な刀だ。

「うっん、んん……」

頭巾の内側で熱い吐息が洩れ、瞳が潤む。

その変化を敵に気取られぬよう、紅頭巾は目にもとまらぬ身のこなしで匕首を受けた。

「おおっ！」

切りかかった男が驚愕の声を発した。なんと、匕首の鉄の刃が豆腐のごとく切断されたのだ。棒立ちになる盗賊の胸に、緋色の刃がぶちあたる。だが、鉄すら両断する豪剣は、

男の胴を斬らなかつた。

かわりに赤い稲妻が盗賊の全身に走る。

「！」

覆面から覗く眼球が白く反転して、男が即座に意識を失つて昏倒した。

一瞬の怪事に色めき立つ盗賊の群れへ、今度は紅頭巾が突進した。右に左に切りこむたびに、赤い電光が闇をしりぞけ、盗賊が失神する。

「うっんん……くふう……」

ばったばったと敵を薙ぎ倒しながら、紅頭巾は布の下で熱い喘ぎを小さく洩らしていた。着物の布地とこすれる胸と股間から甘い痺れが立ち上り、じりじりと苦しめられる。気を抜けば、喘ぎがよがり声となつてあふれ出てしまう。

肉唇の狭間から自然と流れる蜜に濡れた布が、敏感な部分にべつとりと張りつき、ますます快楽を強くしていく。

だが、肉体の淫らな快感をうわまわる激烈な思いが、紅頭巾の中で吹き荒れていた。
(お父様、ついに、ついに仇を討てます！)

弐

「お父様！」

あおい葵は自身番の小屋に入ったとたん、ひと言叫んだだけで、絶句してしまった。

父の部下である岡っ引の松五郎まつごろうから知らせを受け、八丁堀の役宅から駆けつけた葵が目にしたものは、戸板に乗せられて横たわる父の変わりはてた姿であった。

葵の父、南町奉行所同心である佐野兵衛さのひょうえは、三日前に家を出たきり、もどつてこなかった。妻を亡くした父を心配して、二十歳になつても嫁に行こうとしない葵に、帰つてきたら今度こそ見合いをさせるからなど言い残して、いつものように笑つて兵衛は家を出たのだ。それなのに、父は全身に無数の穴が空き、破壊しつくされたぼろ人形のようになつていた。日夜犯罪と闘つている奉行所の者たちも、こんな異常な死体は目にしたことがない。父のあまりに現実離れした姿のためか、葵は涙が出なかつた。ただ八丁堀小町として評判の美貌をきつくこわばらせて、突然低い声を出した。

「父はどうして、こんなことになつたのですか」

背後から、落ち着いた力強い男の声が返つた。

「兵衛は、盗賊の鬼火の権三一味を探索していた。今日、ようやく一味の盗人宿を見つけたとつなぎがあつた。しかし、われわれが着いたときには、無人の宿に兵衛がこのありさまで倒れていたのだ」

「でも」

葵は身体をまわして、激しく怒鳴りつけた。

「どうしたら、こんな恐ろしい死になるの！」

葵は目を見張った。相手は南町奉行大岡越前おおおかえちぜんだったのだ。しかし、いまは控える気にはなれない。奉行も無礼をとがめることなく、沈痛な面持ちで答える。

「残念だが、わからぬのだ。銃の傷らしいのだが、南蛮の最新の銃でも、かように大量の弾を撃つなど到底無理だ」

番屋のすみにいた松五郎が、夏だというのに凍えたように肩をすくめた。

「やっぱり、噂は本当だったんだでさ」

「噂？ 松五郎さん、噂とはなに？」

同心たちや与力が沈黙したまま顔を見合わせる。葵には、全員の顔から血の気が失せて見えた。静寂に耐えきれなくなり、松五郎がまたしゃべりだした。

「お嬢さん。権三一味だけじゃねえんで。裏の世界じゃあ、南蛮から来た妖術師が、江戸中の悪党にこの世のものじゃねえ恐ろしい武器をばらまいてるって、もっぱらの評判だ。このあいだも、火盜改かとうあらためが五人も炭みたいにまっくろこげになって、隅田川に浮いてやがった。もう俺たちの手にはおえねえ」

「馬鹿者。十手をあずかる者が、流言飛語を信じてなんとする。われわれは」

と、つづく大岡越前のきびしい叱責も、葵の耳には入らなかつた。父の死に顔をじっと見つめ、胸の中で同じ言葉をくりかえしていた。

「たとえばどのような敵であろうとも、この身は地獄に落ちようとも、必ずやお父様の仇は

て、皮膚の上をすばやく移動して小さく収束する。

「んっ、んんうっ！」

金属は小さな赤い輪に変化して、葵の肉体の三ヶ所に収まった。二つは左右の大きな胸の先端の乳首に、もうひとつは女にとってもっとも敏感な股間の肉の粒にはまっている。

本来の葵のその部分は、金属をはめられるほど大きくはない。しかし、赤い輪に捕らえられた肉体は、ほんの一瞬の間に著しく変化していた。

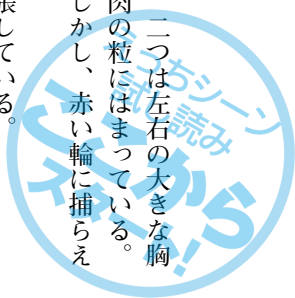
硬くしこりたった左右の乳首は、子供の小指ほどの大きさに膨張している。

女の肉芽にいたっては、長さも太さも勃起した大人の男根そのものだ。先のほうがふくらんだ形も亀頭そっくりで、へその位置まで届く先端には鈴口と同じ細いきれこみがあった。本物の男根との違いは、表面を被う皮がないことだ。赤みの強い桜色に染まった肉の棒が、見るからに敏感そうにひくひくと震えている。

異様な変身を遂げた葵の姿をまのあたりにして、幸の頭に浮かんだのは、輪をはずさなくしては、という切実な思いだった。三つの輪は、繊細な女の急所にきつく食い入っている。とても痛いに違いない。そう考えて、幸は両手を葵の肥大した陰核へのぼした。指が赤い輪に触れる。

「ううんあああああっ！」

葵は絶叫した。肉に食いこんでいた三つの輪が同時にゆるみ、両方の乳首と肉棒の先端



から、白い液体がすさまじい勢いで噴出したのだ。

「あ、ああ、いい、気持ちいいの！」

胸と腰から発するとてつもない快感に、葵は頭が真っ白になる。葵は男の経験がない。自慰というものすら知らない。身体の三箇所から白汁を飛ばしたときの快楽は、葵がはじめて味わった肉体の悦楽だ。本人には較べるすべもないが、通常の自慰よりもはるかに深く、激しかった。全身に電流が走り、魂が焼きつくされたかのようなのだ。

葵の体液を顔や着物に浴びた幸も、身体中が熱く火照ってくる。粘り気のある白い液体には、本来の母乳や精液とは異なり、独特の甘い薫りと味があった。そのせいなのか、下半身がずくずくと疼きはじめる。

「あ、葵さま」

「お、お幸、助けて。ああ、まだ、胸も股も、ずきずきするの」

年下の少女を見つめる瞳はしつとりと潤み、自分では理解できない、そしてどうにもできない欲望に輝いていた。

「どうしたらいいの。気が変になりそう。身体が燃えるように熱い。ああ、どうにかして」

「承知しました、葵さま」

幸は、葵が望むものを理解して、手早く濡れた着物を脱ぎはじめた。

「な、なにをしているの、お幸ちゃん」

「わかっていきます。幸におまかせください」

幸の着衣がすべて脱ぎ捨てられた。葵ほど大人らしくはないが、十代にしては胸も尻もよく成長した肉体があらわになる。幸の裸身を目にして、葵は自分が何を欲したのか、思い至った。自分は幸に肉の交わりを求めたのだ。

「ま、待って。いけない。お幸ちゃんに、そんなことをさせるなんて、できないわ」

「心配は無用です。あたしは傍若無人な盗賊たちのなかで暮らしていたんですよ。おちんちんのあつかいは心得てます」

「おちんちん！ わたしの身体に男のものがあるというの。わたしが男になってしまったと、ああんっ！」

幸の手が、葵の肉棒を握った。それだけで、ずきんと快感の衝撃が背筋を走る。

「葵さまの白いのを浴びたら、あたしもこれが欲しくてたまらなくなっちゃいました」

てのひらに熱く脈動を伝えてくる肉棒を、幸が付け根から先端まで、ぺろりと舌で舐めあげる。

「はっひいひい！」

陰核の包皮は肉棒の根元にある。葵のものは大ききこそ立派だが、いわば全体が剥けたばかりの少年の亀頭だった。あまりの強烈な感触に、断続的に荒い息が洩れる。

「ひっ……はん……ふうっ……くはあ」

幸が女の棒にたつぷりと唾液をまぶすと、肥大した陰核全体を口にふくんだ。唇と舌とすばめた頬の内側すべてを使って、過敏な器官をしごきたてる。盗賊たちに鍛えられた口唇奉仕の性技に、葵はたちまち昇りつめた。

「あつ、ああつ、お幸、ま、また、出ちゃう、お幸の口に出しちゃう、だめつ」

葵は快楽に痺れた腰をもどもぞと蠢かして、幸の口から肉棒を抜こうとする。だが、幸が離してくれない。いつそう強く、執拗に葵を吸い上げてくる。

「ああつ、だめ、そんなの、だめつ、うん、出るっ！」

葵の全身がきつくつっぱった。身体が蕩ける悦楽とともに、大量の白汁を放出してしまう。「んんっ、んううう」

幸も喉を灼く感触に、うっとり陶酔した。胃に収まった熱が、全身の神経を昂らせていく。葵が出す粘液には女体を淫らにさせる作用があるようだった。

「ああ、葵さま、もう、がまんできません。幸のおんなを、葵さまのおちんちんで貫いてくださいませ」

葵の裸身が、幸の手で横たわらされた。そそり立つ肉棒を、幸が大きく脚を開いてまたいでくる。

葵は初めてまじまじと幸の秘所に見入った。処女の自分とは異なり、年下なのに肉唇がぶつくりと発達している。これが男女の営みに慣れた身体なのだと思う。それがいま、自

分を求めてほころび、よだれを垂らしている。見ているだけで、二度の射精をしながらまだ勃起したままの肉棒が、すぎずきと悲鳴をあげた。

「ああ、わたしはこれから、お幸ちゃんと結ばれるのね。こんなことになってしまいうんて。これが、言い伝えの女ではなくなるということなのね」

「幸とでは、おいやですか。葵さま」

「ううん。お幸ちゃんこそ、気持ち悪くはないのかしら。こんなわたしとなんか」
「気持ちいいです」

幸の腰が下ろされ、濡れた肉棒と秘唇が触れた。

「あうっ！」

「ひゃう！」

幸の中は驚くほど熱く、柔らかく、きつかった。

「あ、ああ、これが、お幸ちゃんの中、ああ、温かくて、すごく気持ちいいわ」
「はあ、葵さまを、もつともつと気持ちよくさせてください。ほら、こうすれば」

幸が、葵への愛情と自身の欲望のために腰を上下させながら、みずみずしい尻でのの字を描いてうねらせる。盗賊の情婦にでも伝授されたのだろうか。とても十五とは思えない巧みな腰使いだ。

「ああっ、んっ、いいっ、すごいい。お、お願い、胸もいじって。乳首が疼くの」

「喜んで、葵さま」

幸が下半身の動きを止めずに両手をのばして、小指ほどもある葵の左右の乳首をしつかりと握った。ここも陰核同様に熱くなり、どきどきと脈打って、いかにも貪欲そうだ。

幸の指がそろって上下にしごきはじめる。乳首がまた弾けそうにふくらみ、気も遠くなる肉の歓喜をあふれさせた。

「おおあああ、おちんちんも、乳首も、溶ける、蕩ける。ああ、お幸の中に、出ちゃう！」
「出してください、葵さま、たくさん出して」

幸の手が、葵の乳房を寄せた。接近した肥大乳首を、二ついつしよに幸の口がしゃぶる。舌が先端を刺激した。

「あひいい、出る、両方出るううう！」

また三つの快楽生産器官から、五歳も年下の少女の膣と喉へ白い粘液がどぶどぶと流しこまれる。大量の射精と射乳を受けて、幸も同時に頂点へ達した。

「はあああ、幸も、いかせていただきます、んんっ、う、いくうっ！」

「あああ、だめえ、もつと、もつと出したい、お願い、もつと搾ってちょうだい」
「幸も、もつと欲しいです。ああ、葵さまのを飲みたい」

淫らな肉体に変容した葵と、媚薬効果のある体液を飲んだ幸は、明け方まで交わりつづけた。そして、二人はつながったまま眠りについた。

身の足に当たって転がり、葵が磔にされた台にぶつかる。幸が悲鳴をあげ、葵も絶句した。その間にも、大男の身体がばらばらになって、床に散乱する。

「おまえは、誰なの？」

分解した権三の破片にかこまれて、全裸の女が立っていた。年齢は二十八、九歳だろう。端正だが冷酷そうな美貌と、妖艶に熟れた肉体を誇らしげに見せつける美女だ。

髪は茶色で、瞳も南蛮渡来の色ガラスのように青みがかっていた。乳房は、葵がいままで湯屋などで目にしたどの女よりも大きい。目を見張るほどだ。腰はきれいにくびれ、また尻がみっちり張り出している。

「あたしは鬼火の権三の娘、不知火しらぬいだよ。二人とも、あたしの目の色が気になってるみたいだねえ。親父が出島で空き巣をしていたときに、南蛮人の女を犯して、あたしを生ませたのさ」

「あなたが娘なら、本物の権三はどこに隠れているの」

「本物なんて、もういやしないよ。親父は半年前に病でぼっくり逝っちゃまってねえ。あたしが時空軒の作ったからくり鎧を着こんで、子分たちを騙して使っていたって寸法さ。さて、あなたの卑猥な身体でたっぷりと楽しませてもらうよ」

「楽しむって、おまえは女じゃないの」

「あたしは男も女もいける口なのさあ。でも、こんな太い摩羅まらを立てた女なんて、さすが

のあたしも初めてさね」

豊満すぎる胸を揺らして、不知火が近づいてくる。日本人離れた美貌に浮かぶ、粘りつくような笑みに、葵は背筋が凍る思いがした。この女に嬲られたら、自分が破壊されてしまうと直感する。

「やめろ。寄るな。わたしに触らないで、あひいつ！」

二つの乳首を、同時にきつく握られた。刺激を奪われたまま放置され、悦楽への期待ばかりが充満した胸で爆発が起こった。葵の胸がそりあがり、腰が大きく跳ねる。肉棒が前後に揺れた。

「ひああつ、いいつ、気持ちいいつ」

「へえ。そんなにいい心持なのかい。よかったねえ」

不知火に嘲笑を浴びせられ、葵は必死に抵抗を試みた。

「お、おまえなどに触られて、あ、ああ、感じるわけがない、あう、うんん……」

再び傍若無人な強烈さで、乳首を握りしめられる。たまらず葵が開いた口を、不知火の唇でふさがれた。どろりとした唾液が流しこまれ、舌で口内をかき混ぜられる。葵は相手の舌を噛み切ろうともしたが、そのたびに乳首をひねられ、快楽に痺れて力が抜けてしまう。

「うんっ……はくっ……ほううっ……」

（ああ、憎い父さまの仇に嬲られているのに、あとからあとから気持ちよくなってしまう。

こんな情けない身体になってしまったなんて。許して、父さま)

「はあああ……」

ようやく不知火の口が離れた。口内の陵辱から解放されて、葵が安堵の息を吐いたとたん、胸を強引に寄せられた。ぬめついた唇が、左右の乳首を一度に咥える。

「あうううっ！」

あまりに衝撃だった。同じことを何度も幸にしてもらったが、比較にならない。二回連続で紅雷丸を発動させた代償が、かつてない強烈な感度となって返ってきている。いまや葵のすべてを、制御できない欲望と快楽が支配していた。

不知火が顔を上下に動かし、舌と唇で二本の勃起乳首をしごきたてた。美女の顔が動くたびに、乳首だけでなく胸全体が破裂しそうになる。

(ああっ、溜まってる。胸の中に白い乳汁が溜まっていつてるわ。出したい。乳首から早く出さないと、気が変になってしまいそう。それに、下のほうのものも、もう、もう)

不知火が舌先で水を飲む猫のように乳首を舐めながら、上目づかいに葵を見つめた。

「そろそろ特大の摩羅をしごいてあげようかね。とつくにがまんできなくなってるんだろ。しごいて欲しかったら、あたしにお願いしますと頼むんだよ」

「馬鹿な。誰がおまえなんか」

「これでも頼まないつもりかい」

不知火の人差し指が、肥大陰核をびしつと弾いた。

「はあううっ！」

葵の目の前に閃光が散った。ほんの一瞬だが、この世のものではない喜びが全身を駆け巡った。それだけで、葵の誇りも怒りも憎しみもぐずぐずと溶け崩れかかる。一度快楽を知ると、肉棒の疼きがいつそう深刻になってしまう。もつと味わいたいと悲鳴をあげる。

（欲しい。もつと気持ちよくなりた……ああ、だめ。そんなことを考えては絶対にだめよ。この女は、父さまの仇なのよ）

「葵ったら、がんばるねえ。あんたの父親を殺したおわびに、あたしが手ずから気持ちよくしてさしあげようって言うてんだよ」

さらに二度、三度と、燃えつづける女の肉棒を指で弾かれる。

「きひゃあ！ はひいいい！」

葵の必死の抵抗も、自分自身の快楽への渴望に呑みこまれていく。欲望と憔悴だけが、葵を完全に征服する。

（ああ、だめ、もう、だめ、父さま、許してください）

「し、して……」

「声が小さくて、聞こえないねえ。武士の娘なら、もつとはきはきしなよ。誰の何をどうして欲しいんだい」

口ごもる葵のものが、またもや指で打たれた。

「ひううっ！ あ、葵のおちんちんを、いっばいしごいてえ！」

「どなた様にしごいて欲しいんだい」

「し、不知火様に、葵のちんちんをしごいて欲しいのっ！」

「よしよし。いい子だねえ。あの小娘にはできないことをしてやるよ」

不知火が大きく開いた葵の両脚の間に入り、たわわに実った左右の豊乳で、そりかえった陰核棒を挟んだ。

「はあああっ」

初めて知る快い感触だった。蕩けるような柔らかさと、ぷりぷりした弾力をあわせ持つ乳房にみっちり押し込まれ、上下にこすられるのだ。さらに柔肉の間から突き出た亀頭部分を、不知火の口に咥えられ、舌で責められた。

「ふああっ！ くう、いい、気持ちいい！ あおおおっ」

乳房と口を駆使した攻撃が、葵を追いつめる。艶乳のひとこすりごとに、淫舌のひと舐めごとに、射精をしそうになった。しかし、肉に食い入った赤い輪が許してくれない。

「あたしのこれをやられたら、どんな男でもとつくに白いのを出しているところだけどねえ。聞いたとおり、幸が触らないと母乳と精も出ないのかい。あたしとしては大助かりさ。何度でもできるからねえ」

葵の腰を、不知火がまたいだ。熱に浮かされた瞳に、女賊の秘部が見える。すでに充血して花びらを開き、蜜を垂らしていた。

「葵みたいなかわいい女をいたぶっていると、たまらなく濡れちまうのさあ。そろそろ、あたしも楽しませてもらうよ」

不知火が腰を落とした。欲望にまみれた蜜孔が、膨張した葵の龟头を呑んだ。葵の全身ががくがくと震え、両手の指が台を強く引つかく。

「ひ、ひはあつ！ ああ、すごい、すごいっ！」

「はあ、いいよう。極上の太摩羅だねえ」

不知火の豊満な尻が縦横無尽に動きはじめた。自分の快樂だけを考えた傲慢な腰使いだ。それでも通常よりはるかに敏感になった葵の肉体にとつては、気が狂いそうな悅樂を押しつけられる。さらに限界まで勃起した左右の乳首を、両手でしごきたてられた。

葵は思考もできなくなる。快樂の渦の中で、ただひたすら射精と放乳だけを願う。

「ああっ、ひい、だ、出させて、はうう、お願い、出させてえっ！」

「馬鹿だねえ。おまえは二度と精を出すことはできないんだよ。あたしのおもちゃにされて、あたしが満足したら死ぬのさあ」

冷酷な宣告が耳に入っても、いまの葵には理解できなかった。ただただ同じ懇願をくりかえしつづける。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>